江陽小

主体的に学ぶ児童の育成

～児童が表現したくなる「しかけ」と「発問」の工夫～

（３年計画の１年次）

校長　　豊島　匡生

１　研究主題について

令和２年度の研究主題「確かな学力を育てる授業づくり」の実践についてのアンケートでは、児童に問いの意識をもたせる「しかけ」と「発問」の工夫についての研究を深め、日常の授業に生かすことができたという意見が多かった。実際、導入場面や自力解決の場での「しかけ」や「発問」の工夫によって、児童が、課題解決に向けて主体的に学習に取り組む姿が見られた。

しかし、本時の目標に迫る場面で、意欲や活動が停滞することがあったため、導入場面での「しかけ」や単発の「しかけ」ではなく、授業全体を通して児童の主体性が持続するような「しかけ」の工夫や、効果的にしかける場面選びについて、さらに実践を重ねていくこととした。

そこで今年度は、教科を算数科に絞り、児童に問いの意識をもたせる「しかけ」と「発問」について研究を深めることとした。導入では、課題提示や発問・指示を工夫することで、児童が自ら問題を発見できるようにし、全体でそれを共有させる。展開では、児童が表現したくなる「しかけ」を発問に取り入れたり、場面を選んで効果的にしかけたりする。それによって、これまで身に付けた「見方・考え方」を働かせて課題解決に向かい、最後までやり遂げようとする児童を育てることができると考える。このような授業を重ねることで、主体的に学ぶ児童を育成していきたい。

２　研究のねらい

問いをもち、最後まで主体的に学ぶ児童を育成するための「しかけ」と「発問」の工夫について、授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

(1) 導入で、課題提示や発問・指示を工夫することで、「あれ？」「どうして？」「今までとちがう。」「このままではできない。」「どうすればいいの？」など、児童が自ら問題を発見することができる。

(2) 展開で、児童が話したくなる「しかけ」を発問に取り入れたり、場面を選んで効果的にしかけたりすることで、児童の主体性を持続させることができる。

４　研究内容

(1) 問いの意識をもたせそれを全体で共有させるための、課題提示や発問・指示の工夫。

(2) 授業全体を通して児童の主体性を持続させるための、「しかけ」の工夫や場面の選択。

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者・題材名・講師	授業の概要・成果・課題
7	6	計画訪問・要請訪問 第１回授業研究（２学年） 授業者：担任　横内真樹子 ＴＴ　花岡梨紗 題材名：「１００をこえる数」 講師：総合教育センター副所長 松橋祐哉　先生	既習を使って主体的に数えたり、教師や友だちと対話して解決策を見出したりすることができた。解決策については、教師の説明よりも他のグループの数え方から気付かせることができればよりスムーズに展開でき、個人で数えさせる活動もできたのではないかと思われる。
１２	1	第２回授業研究（６学年） 授業者：担任　野里貴広 ＴＴ　花岡梨紗 題材名：「図形の拡大と縮小」	プログラミングソフトを使って正三角形を拡大・縮小することで、対応する直線の長さや角の大きさの関係について理解を深めることができた。本時が、ICT を活用することで算数科のねらいに迫るものなのかを十分見極めて、ツールとして有効に活用することが望まれる。

(2) 一般研修

月	日	内容・講師	研修の概要
5	２２	児童理解 行動面・学習面・身体的な面・家庭環境等	左記の面で、共通理解して指導する必要のある児童について、顔写真を見ながら情報を共有した。
7	２１	救命救急法（ＡＥＤの取り扱いなど） 講師：八戸東消防署小中野分遣所 職員３名	2015 年度のガイドラインにそって、意識の確認、呼吸の確認、胸骨圧迫、ＡＥＤの演習を実施した。
8	２０	クロームブックの活用 （クラスルームの作成・活用など） 講師：八戸市総合教育センター 主任指導主事　石井一二三　先生	授業での活用例として、Meet、ドキュメント、スプレッドシート、スライドの演習を実施した。 Classroom を作成し、Meet で児童を参加させるやり方を実習した。

６　研究の成果

(1) 導入での課題提示や発問・指示を工夫したことで、児童が問いの意識をもつようになった。

(2) 児童が課題を把握し、「できそう」「話したい」と見通しをもって解決しようとする姿が見られるようになった。

７　研究の課題

(1) 展開で、効果的に「しかけ」をする実践があまり多く得られなかったので、来年度も実践を続ける。

(2) 導入での「しかけ」は、大掛かりなものではなく、児童の知的好奇心を刺激し日常化できる授業実践を積み重ねる。　（記入者　花生　貴美子）